

随 筆

「一兵卒」と脚気のお話

岡江 俊治

田山花袋という明治時代の小説家の作品に「一兵卒」があります。岩波文庫でわずか22ページの短編小説です。日露戦争に従軍した一兵士が脚気にかかり、死んでいくまでのあわれなお話です。中には十八連隊、豊橋、新城町、三河国渥美郡福江村などの固有名詞が記載されており、主人公である兵士の具体的な苗字や名前までも記されています。すでにおわかりになりましたが、これらの固有名詞はすべて愛知県に関係しています。即ち十八連隊とは陸軍歩兵第十八連隊のことで、当初名古屋が所在地でしたが、明治19年以後豊橋に移駐しました。新城町は現在の新城市、福江村は現在の渥美半島の田原市福江町です。花袋は日露戦争の従軍記者として実際に戦地に赴いたようです。その際、ある従軍兵士となんらかの関わりができて、その人物の行動記録をもとに小説を書いたものと推察されます。

日露戦争では多くの死者が出ました。記録によれば陸軍総兵力は108万8千余名であり、全傷病者数が35万2千7百余名でした。そのうち脚気患者数は21万6千6百余名と記録されていますが、他病に算入されているとみられる者を含めて推定すれば「少なくとも25万」とされています。戦病死者数は3万7千2百余名であり、脚気によるものが2万7千8百余名（約75%）にもものほりました。即ち日露戦争に出征した陸軍将兵で病氣や戦傷で亡くなった方の4分の3に相当するのは脚気が原因であったのです。当時、日本とロシア以外の観戦武官の記録によれば、突撃してきた日本兵は足元がふらふらした者が異様に多かったとあり、恐怖のため、酒を飲んでいただけではないかと報告しています。まさしく脚気の症状を表現しています。

さて、もう一つ驚くべき記録があります。日露戦争終了後の海軍医務局の発表によれば、戦争中の海軍の脚気患者は87名、同病による死者はわずか3名でした。当時の海軍の軍医部長である高木兼寛は、艦上勤務で航海中はほとんど白米のみの場合と、寄港して陸上で十分な副食を摂取していた場合との脚気の発症率に大きな違いがあることに気づき、脚気はある栄養成分が不足して生じる疾患であると考え、戦争前から米麦混合食や副食の充実に力を注いだ結果、

脚気患者の激減に成功しました。日露戦争の10年前の日清戦争でも脚気患者は4万1千余、4千余名の死者が報告されています。実はその頃から兵食が白米であったのが脚気に関係することが疑われ、陸軍でも一時は米麦混合の主食にして脚気患者減少がみられたのです。しかし、海軍での栄養障害説では論拠が不十分とされたこと、戦地では米麦混合食では炊飯が簡単でないこと、さらには当時の兵士は富裕層が少なく、白米自体が珍しいことから麦混合が嫌われたこと等の理由が重なったため、日露戦争では陸軍は白米単独の主食に戻されました。海軍は引き続き、米麦混合食とし、独自に海軍カレー等の栄養に富んだメニューの開発にも力を入れました。その結果が前述のように、陸軍と海軍の脚気患者数の大きな差となったのです。日露戦争の途中であまりにも脚気患者とその死者が多いことから、当時の陸軍大臣は軍医部長に対して強く米麦混合食に変更するように命令した結果、やっと実現することになり、以後の脚気患者の激減につながりました。戦後の明治41年に臨時脚気病調査会が設立され、永きにわたって脚気の原因について議論されましたが、途中、ビタミンの発見等の新たな知見が重なって、やっと大正13年に「脚気はビタミンB欠乏による栄養障害病である」と認めたことをもってその活動に幕が閉じられました。結局16年もかかったこととなります。なぜこれほど時間がかかったのかについて諸説がありますが、あまりにも多い為すべてをご紹介することはできません。ただ、当時の医学界、特に陸軍の衛生部門では一度認定された脚気伝染病説を覆すのは困難でした。海軍ではすでに脚気栄養障害説が確立されていましたが、その科学的な論拠が不十分であったことで陸軍は徹底的に攻撃したようです。特に前述の高木兼寛が官学出身でなかったことも関係したのではないかとされています。ところが海外では高木の名前は大変有名となり、のちに政府からも顕彰されました。また、現在の慈恵医大の創設者にもなりました。

私の母方の祖母（明治18年生まれ）は存命中に、私が食事中に好き嫌いがあることがわかると、「ごはんばかり食べると脚気になるよ。」とよく注意されました。祖母は自分の少女時代に日露戦争の話聞いたのでしょ。最後にこのお話をお伝えしたのは理由があります。田山花袋の「一兵卒」という小説のモデルは実在の人物であると書きましたが、その人物こそ私の父方の祖母の実父、すなわち曾祖父でした。小説の中で花袋が用いた主人公の氏名は、実際の曾祖父の氏名と一字違いであったのです。愛知県田原市福江町に潮音寺という曹洞宗のお寺があります。そこにあるお墓の墓碑銘には曾祖父の実名とともに、日露戦争で亡くなった日時と場所が記されています。私は中学生の頃その事実を知りました。花袋がどのように取材したかは今となってはわかりません。その

ことを知っている父方の肉親が全員亡くなったからです。しかし、大人になってからもずっと覚えており、脚気とはどんな病気なのかが気になっていました。最近になって当時の記録をまとめた単行本を知って、その本を中心に興味をもって調べた結果、このようにご紹介することができた次第です。今後も当時の状況の手がかりとなる記録を求めてゆき、自分の次の世代に伝えていきたいと思っています。

(安城更生病院前副院長)